

2011年8月26日

内閣府食品安全委員会事務局評価課内

「放射性物質の食品健康影響評価」意見募集担当 御中

「放射性物質の食品健康影響評価に関する審議結果（案）」について

(法人名) 日本生活協同組合連合会
(所在地) 〒150-8913 東京都渋谷区渋谷 3-29-8
(電話) 03-5778-8109

今回、貴委員会が公表された「評価書 食品中に含まれる放射性物質（案）」（以下評価書案）に関して、比較的短期間で精力的に審議を行い、国民に公開したことに対して敬意を表します。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故で環境中に放出された放射性物質による健康リスクの程度について、様々な情報が錯綜し、国民に不安が広がっている状況において、これまでに得られた科学的知見を整理したことについては意義のあることと考えます。さらに、評価書案において、外部被ばくと内部被ばくを総合して考慮する視点を提供したことは、今後必要とされるリスク管理における重要なポイントと考えます。

しかしながら、今回の貴委員会の評価には不十分と考えられる点が存在すると考え、以下の意見を提出いたします。なお、以下に示す意見1、2、4については、7月26日に開催された貴委員会のワーキンググループの最終（第9回）会合においても委員から同趣旨の意見が述べられておりました。こうした意見に対して十分な議論が行われないまま同日評価書案がまとめられ、委員長に報告されたことは大変遺憾であり、今後、国民に対して十分な説明が必要と考えます。

（意見1）100 mSv未満の線量についても、その健康リスクの程度について、リスク管理機関に示す必要があります。

- 放射性物質のリスク管理に当たっては、他のリスクとの関係やコストも考慮した上で施策を講ずる必要があります。そのためには100 mSv未満の線量による健康リスクについても踏み込んだ評価が必要です。
- 放射線による発がん等の確率的影響については、国際的には、閾値がないとの前提でリスク管理が行われています。この考え方は、遺伝毒性発がん物質の取り扱いと類似しており、貴委員会でも、遺伝毒性発がん物質に対しては、不確実性が見込まれても、発がんリスクを確率的に示すという手法でリスク評価が行われてきたはずですが、100 mSv未満の健康リスクについても、このような考え方で評価し、結論を示すことが必要と考えます。

（意見2）100 mSvが閾値ではないこと等、今回の評価の結論について分かりやすく国民に説明することが必要です。

- 「放射線による影響が見出されているのは、生涯における累積の実効線量100 mSv以上」との結論ですが、これは、100 mSvを超えた場合に（必ず）健康影響が生じ、100 mSv未満であれば健康影響が生じないということではありません。

このことは、貴委員会「委員長からのメッセージⁱ」で、「100 mSvは閾値とは言えないものです」と述べられていることから、貴委員会も十分認識しているものと考えます。

- 貴委員会が示した結論の数値が独り歩きして、100 mSvがあたかも安全と危険の境界を示すものとして認識されないよう、国民に十分説明することが必要と考えます。

（意見3）外部被ばく、内部被ばくを合わせて検討したことは評価できますが、貴委員会の役割に照らせば、それに対して食品（飲料水を含む）がどの程度寄与しうるのかの検討もすべきです。

- 放射性物質による健康リスクは、食品のみにとどまらない問題です。弊会は、政府が外部被ばく、内部被ばくを総合的にとらえ、今後、地域・年齢・状況等に応じた低減の目標値を設定していくことが必要と考えています。原子力安全委員会も「被ばく線量に関しては、内部被ばくも外部被ばくも合計で考えるべき」との見解を示していますⁱⁱ。
- しかし一方、貴委員会の役割は、食品に含まれる危害要因についてリスク評価を行うことです。リスク管理機関である厚生労働省などの関係者にとっては、貴委員会が示した結論は、どのようにとらえるべきか、解釈が難しいと思われれます。例えば、各地域の住民の総被ばく量に対して、食品（飲料水を含む）がどの程度寄与しうるかといった情報が示されなければ、今後、食品についての基準を検討していくことは難しいと考えます。
- 貴委員会には専門家・事務局両者について、放射性物質の健康リスクについて検討するための十分な体制が整っていなかったことも懸念されます。外部被ばく、内部被ばくを総合した健康リスクに関する知見の整理を行うのであれば、他省庁の協力も得て合同で行う等の手段もあったのではないかと考えます。

（意見4）結論を生涯における累積の実効線量で示していますが、根拠とした文献では生涯累積の実効線量では示されておらず、結論を導くにはギャップがあると考えます。

- 結論を導くに当たって最も重要視された論文は広島・長崎の被爆者に関する疫学調査です。これは一回、瞬間的に被ばくしたケースと考えられ、低線量を継続的に被ばくするケース（例えば、年間数 mSv を数年～数十年に渡って被ばくするなど）とは、同等ではない可能性があります。

以上

ⁱ http://www.fsc.go.jp/sonota/emerg/fsc_incho_message_radiorisk.pdf

ⁱⁱ <http://www.nsc.go.jp/info/20110725.pdf>